特集2
揺れる気持ちに寄り添う！
看取り期の家族ケアと遺族ケア

高齢者施設における看取り期の家族看護

牛田貴子
湘南医療大学
保健医療学部 看護学科 老年看護学 教授

研究領域は、老年看護学・家族看護学。看護学修士、医科学博士。保健師として市町村勤務、助産師・看護師として病院に勤務した後、日本看護協会看護研修学校で学び1992年より看護基礎教育に携わる。山梨県立看護短期大学、山梨県立大学看護学部、信州大学医学部保健学科を経て、2015年4月より現職。現在の研究テーマおよび病院、施設、学会、研究会などで提供しているプログラムは、「退院支援」「退院調整」「高齢者ケアに携わる看護師の教育支援」「認知症看護」「キャリア中期看護師の教育支援」などである。

看取りの場所

高齢者施設における看取りは，介護老人福祉施設だけでなく，介護老人保健施設，認知症対応型グループホーム，有料老人ホームなど，さまざまな場で行われるようになった。全国の55歳以上の男女を対象とした2012年度の内閣府の調査[1]によると，最期を迎えたい場所は自宅54.6％，病院などの医療施設27.7％，特別養護老人ホームなどの福祉施設4.5％，高齢者向けのケア付き住宅4.1％であり[1]，2007年度の同調査[2]と大差はない。しかし，これから急増する高齢者の死亡数に見合った看取りの場所の確保は困難であり[3]，自宅でも医療施設でもない場所での看取りが大きな課題となっている。

施設での看取りを自ら希望する事例もあるが，その一方で本人の希望どおりではない，家族の意向が一致しないままに看取りとなる事例もある。「高齢者施設における看取り期の家族看護」の検討は，看取りの場所の確保が困難な時代に突入するにあたり，多様な示唆を与えてくれるだろう。

表1に，2004年に発表された『日本看護協会が提案する介護施設等における看取り研修プログラム』[4]を示した。この中には，意思決定支援や意向確認と説明，調整のためのコミュニケーションやグリーフケアの方法など，家族看護に直結する内容が含まれている。プログラムの内容詳細は，介護施設の看護実践ガイド[5]を参照していただきたい。

本稿では，病院や自宅での看取り期の家族看護と高齢者施設での看取り期の家族看護との違いに焦点を当て，これまで研究活動や臨地実習指導でかかわらせていただいた皆様の貴重な言葉を基に進めていく。

家族の和解

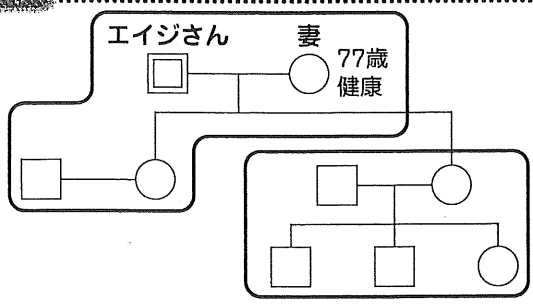
96歳のエイジさん（仮名）は，「介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとってお迎えを待つとはどういうことか」というインタビュー[6]に，快く応じてくださった一人だっ

表1 日本看護協会が提案する介護施設等における看取り研修プログラム

	内容	
	大項目	小項目
Ⅰ 基礎知識編	老衰死および終末期の状態像の変化	・老衰死の状態像 ・終末期の状態の変化
	全人的苦痛	・身体・心理・社会的苦痛 ・スピリチュアルな苦痛
	看取りに関する法律等	・医師法第20条但書と第21条 ・看取り介護加算
	倫理的課題	・意思決定支援（本人・家族など）
Ⅱ 実践編①	本人と家族の意向確認と説明	・意向確認の手順 ・状況説明のタイミング ・チーム内の役割確認
	苦痛緩和と予防的な対応	・症状アセスメント ・医師との連携 ・必要な医療提供 ・緩和ケアと日常ケアの表・介護職等との連携
	臨終時の調整	・調整のためのコミュニケーション
	家族の支援	・グリーフケアの方法
Ⅲ 実践編②	エンゼルケア	・一連の手順の確認
	多職種と連携したケアの仕組みづくり	・看取り指針・マニュアルの整備と活用 ・介護職等との情報共有・連携の方法 ・看取り後のケアの評価の在り方（カンファレンス等）

日本看護協会：日本看護協会が提案する介護施設等における看取り研修プログラム，2014.より抜粋

図 エイジさんの家族構成図



た。20年近く介護老人福祉施設で生活するエイジさんは，４人部屋の窓側のベッドにいた。常に黄色いカーテンをぴったりと閉じ，薄黄色の空間で一日中本を読むことが日課だったが，その時間も短くなっていた。学識経験者らしい物静かさと礼儀正しさ，凛とした雰囲気があった。「自分では（お迎え）そろそろだと思っている。いつでもいいんですよ。生きているうちに○○したいなんて欲はない。準備はできていますから」と，淡々と話した。

エイジさんの家族構成を**図**に示す。年齢が離れた妻と娘たちが健在であったが，入居時もその後も一度も面会に来ていない。相談員がエイジさんの健康状態が思わしくないことを伝えて面会を促したが，妻も娘たちも「顔を見たくない」と来所せず，複雑な家族の歴史が関係している様子だった。

インタビューの最後に，「エイジさんにとって家族はどんな存在ですか」と率直に尋ねた。しばらく間を置いて「家族

は心の柱です」と，胸を張って，しっかりとした語調で答えた。エイジさんが自分から家族のことを話したことは一度もないとスタッフから聞いていた。妻や娘に「死んでも許せない」と思わせる出来事があり，20年以上会うことを拒否され続けてきたらしいという情報もあった。家族という存在は，エイジさんには遠い過去のことだと思っていた。そのため，この「家族は心の柱です」という言葉は，あまりにも意外だった。家族の実態がなくなって20年以上を経てもなお，エイジさんにとって家族は特別な存在であった。文字どおり，心が折れそうなことがあっても支えとなっていたのだと発見した。確信に満ちた言葉の強さと穏やかさに感激し，インタビューをした私が涙ぐんでしまった。エイジさんは「このままでいいんですよ」と付け加えた。実は，インタビューをしながら，「家族の和解」の可能性も探っていた。「何とかして妻や娘が面会に来てくれないだろうか」と考えていたことが伝わったのだと思う。

高齢者施設の入所・入居者には，複雑な家族関係にある人が少なくない。だからこそ，家族を丸ごととらえて介入しようとする家族看護が大切となる。長い家族の歴史を変えようという大それた試みを考えてはいない。ただ，介入が家族の内にある認識や行動を変えるきっかけとなり，これまでの葛藤や緊張状態に変化が生まれることを期待する。

児玉は，終末期の和解の援助について「家族が周囲の人々との関係を見直す際に，和解する・しないに関わらず，関係のありようをともに見つめ，悩みながら，家族が新たなものの見方や関係を獲得するプロセスをともに歩むことである」[7]と述べている。私は，エイジさんの家族の和解は「今しかない」と考えたが，エイジさんは「その必要はない」と教えてくれた。家族と直接会って和解することは，逝く前にエイジさんがしたいことではなかった。長い時間を経て，すでに彼なりの家族に対する新たなものの見方を獲得し，家族との和解は終了し，人生の統合が出来上がっていたのだと学ばせていただいた。

看取り期における家族の意思決定の揺れ

「なぜ施設に入所，入居したのか」をその家族が，どのように意味づけているか。看取り期にあたって，施設入所・入居の出発点が家族の中から掘り起こされることがある。中には，掘り起こしたくなかったそれぞれの思いが表面化し，家族の関係性が揺れることもある。また，これによって，より家族が力強くつながることもある。

88歳のミツさん（仮名）は，介護老人保健施設に入所していた。ミツさんは，実習学生が受け持ちになることをいつも喜んで引き受けてくれた。実習初日には緊張した学生の気持ちをほぐし，不自由な足を自分から見せて「ちゃんと勉

強するんだよ」と学生を励ました。学生たちは，ミツさんから，これまでの家族の歴史を含めていろいろな話を聞いていた。息子さん夫婦も週に１度は面会に訪れて談笑していた。時には，学生もご家族の話の輪に加えていただいた。

いわゆる特養待ちで，ミツさんも承知した上での介護老人保健施設への入所であった。ミツさんは，施設入所について「それぞれの家には事情っていうものがあるんだよ。息子たちは良くしてくれる，（施設スタッフの）皆さんも良くしてくれる。何にも思い煩うことはない」と，学生に伝えていた。自宅に帰りたいとは言わなかった。看取りが近くなると，家族と何度も面談を繰り返した。その結果，そのまま介護老人保健施設で看取ることとなった。

スタッフは，長男の妻からよく話を聞いていた。自宅で介護できない贖罪の気持ちで毎週夫と面会に来ていること，ミツさんの笑顔に救われる時も，さらに罪の意識が深まる時もあること，ミツさんの兄妹やその家族の反応を恐れていること，そんな自分の複雑な思いを夫が支えてくれていることなどである。

私も話を聞く機会が数度あったが，「施設に入れた」という言葉を繰り返し使っていたのが印象的だった。

後日，ミツさんが自宅で亡くなったと聞いた。スタッフの話では，家族の意向が急に変わって，自宅への退所が決まり，自宅で半日過ごして亡くなったということだった。ミツさんのご家族が，急に自宅に戻ることを決め，自宅での看取りとなったプロセスに何があったのかはよく分からない。あまりの急展開に，サービス調整や退所の準備など，スタッフは対応が大変であったと思う。「ミツさんのためにも，ご家族のためにも，家に戻りたいと思った時に戻れて良かった。間に合って良かった」という思いが，スタッフたちにあった。

一度意思を表明しても，家族の気持ちは死を目前にして揺れる。方向性が定まらない，二転三転することはごく当たり前にある。その揺れを認め，揺れに一緒に沿いながら，家族が意思決定できるように看護師はかかわっていく。看取り期には，「ここ（施設）で看取るにしても，自宅で看取るにしても，病院に入院するにしても，私たちはご家族の意思を尊重して支え続けますよ」を言葉と行動で表していく看護，家族の変化に気づき確認を繰り返していく看護が重要となる。特に施設では，入所や入居に至った経過，本当にこれでよかったのかという家族の思いがさまざまに交錯する。家族の意思を尊重して支え続ける看護は，その先にある死の受容に大きく影響する。

10年前に実施した調査[8]では，「終末期について高齢者本人，家族，医師の話し合いの場に看護が必ず同席する」のは，介護老人福祉施設64.8％，介護老人保健施設57.1％，介護療養型医療施設45.8％であった。現在でも，家族と

の連絡は相談員の業務であり，看護師は直接家族にかかわらないという業務分担意識が強い施設もある。これまで，家族の意思決定にどのようにかかわってきたのか，施設に勤務する看護師は，ぜひ，検討してほしい。

家族看護の実際

家族看護とは何か。例えば，エイジさんの例では，家族が直接登場してこないのになぜ？　と疑問に感じるかもしれない。家族看護では，家族を丸ごととらえる。当然，本人も家族メンバーの一員である。家族のメンバーは一人ひとりが違う個人であるが，何か困難や問題が生じた時には，家族全体として元どおりに治そうとしていく力を持っている。しかし，その困難や問題が大きすぎると，自分たちだけでは対応不可能となるので，看護師は少し修復の手掛かりやきっかけをつくる。これによって家族はもともと持っていた力を発揮し，家族が困難や問題を解決していけるようになる。

20年以上会っていない妻と娘たちは，エイジさんにとって今でも大切な家族である。そして，今は困難をエイジさんなりに解決しているので，特に介入の必要はない。こうして家族の話題に触れることは，エイジさんが家族に対する考え方やとらえ方を強化する機会になった。

ミツさんの事例では，スタッフはミツさんが元気な時から家族と良好な関係性をつくり，面談を繰り返して揺れる家族の思いに沿い，「自宅に戻る」という急な家族の申し出が実現できるように支援した。死亡前の数日間にこの家族の中で何があったのか詳細は分からないが，家族が持っていた力を一気に発揮することにつながった。

●具体的な介入方法

では，どんな場面でどのような言葉で家族の話を聞くのだろうか。最後に介入方法を具体的に説明したい。

家族へのインタビューは，看護技術の一つである。特別な教育を受けた看護師ではなく，看護師が誰でもできる家族メンバーの発言を引き出す技術として，筆者は「６つのきっかけとなる質問」を**表２**のように提案している。退院支援に焦点を当てた内容ではあるが，さまざまな家族インタビューで活用できる。**表３**は，10年来一緒に家族看護の事例検討[9]を続けているJCHO湯河原病院のベテラン看護師のインタビュー記録を加筆・修正したものである。対象が特定できないように，事例の背景や状況は大幅に修正している。家族インタビューの対象者は，看取り期の田中さん（仮名，80歳，男性）の妻と長女の２人である。

ⓐ娘さんはどうですか。

「６つのきっかけとなる質問」⑥にあたる，看護師と妻との２人だけの対話ではなく，この話題に長女も取り込み，参加した家族の理解や気持ちの交流を進める意図的な声かけである。家族看護でよく用いる技法であり，「円環的質問」と言う。

表2 家族メンバーの発言を引き出す「6つのきっかけとなる質問」

＊6つのうち，どこからでも話の流れで進めてよい。状況で変形して使用する。質問しなくても，家族が自分からその話題について話してくれる場合も多い。

①今，お困りのことはありませんか？

入院されて，何か困っていることはありますか？
今，どんなことが気がかりですか？

②今の患者様の状況を，どのようにとらえていますか？

今のお母様の状態について，どのように感じていますか？
家にいた時と比べて，どうですか？

③入院後，皆さんの生活はどう変わりましたか？

家族に病人が出ると家族皆が影響を受けると言いますが，実際はどうですか？
今回入院されたことで，ご家族の皆さんの生活は変わりましたか？

④退院後，皆さんの生活はどのように変わりますか？

退院して施設入所されたら，どのようにあなたの生活が変わりそうですか？
ご自宅で介護をすることによって，ご家族の暮らしにどのような影響がありそうですか？

⑤③と④(の返答) について，どのように思いますか？

子どもさんにも手伝ってもらう予定ということでしたが，それについてどう思いますか？
一番大変なのはあなた自身だということですが，それをどう思いますか？

⑥⑤を聞いて，ほかのご家族の皆さんは，どのように思いますか？

ご主人は○○と話しておられますが，奥様はいかがですか？
今の娘さんの話を聞いて，お母様はどのように思いますか？

(ほかの家族メンバーがいない場合)

⑥' ③と④について，ほかのご家族の皆さんは，どのように言っていますか？

今，お話ししてくださったことについて，家でほかのご家族はどのように話しておられますか？
あなたが心配する入所後の家族の変化について，ほかのご家族はどのように言っていますか？

牛田貴子：ケア場面で考える家族看護の展開，P.165，エス・エム・エス，2009.

表3 家族インタビューの実際〈看取り期の田中さん（仮名）80歳男性の妻と長女との面談〉

看護師	先ほどの先生とのお話しの中で，最期は家で看たいということでしたが。
妻	1日でいいから家に連れて帰ってやりたい。
看護師	お母さんはこのようにおっしゃっていますが，娘さんはどうですか。ⓐ
長女	私は仕事をしていないし，実家は近いので手伝えると思います。こういう話は母とこれまでもしていました。
看護師	そうですか。ご家族でお父様のことを大切に考えておられるのですね。ⓑ 田中さんはお話しができなくなりましたが，もし話せたらどうおっしゃると思いますか。ⓒ
妻	きっとこのまま施設で（看取られる）というのは嫌がると思います。入院してそのまま施設に行って，もう3年も家に帰っていない。私たちの都合もあって施設に行ってもらったけど。もうかわいそうで，申し訳なくて。
長女	お父さんが建てた家ですから，何とか帰れないかと思っています。
看護師	もし数日でも家に帰ることになったら，一番困ることは何でしょうか。ⓓ
長女	弟のことです。弟は昔から父が嫌いだから，家に帰ってくるのを反対すると思う。今家には，母と弟が住んでいます。そこに父が帰るとなると。ある意味，父が入院して，やっと家族がうまくいっていたので。ゴタゴタすると母がつらい。
妻	あの子（長男）は口ではいろいろ言うけど，優しいんだよ。
長女	いざとなれば，弟が一番頼りになる。それは知っているけど，父のことは別だと思う。
看護師	弟さんと今日のような話をしたことは。ⓔ
妻	早く話さなくてはいけないと思いつつも，避けてしまっていた。
長女	お母さん，話すつもりでいたの。弟を無視してでも，連れて帰るのかと思っていた。だから，私も頑張るつもりでいたのに。
妻	もしもの時，自分だけのけ者にされていたら悔やむでしょ。それにもうお父さんは話せないんだよ。（涙ぐむ）

ⓑご家族でお父様のことを大切に考えておられるのですね。

田中さんの家族の強みを認めている。ねぎらいでもあり，緊張を解き，自由に話ができる雰囲気をつくる。インタビューの最初に行うことが多い。

ⓒもし話せたらどうおっしゃると思いますか。

「6つのきっかけとなる質問」⑥'にあたる。この場にいない家族メンバー（田中さん）の意見を推察する質問である。仮定的な質問で，思い悩んでいる自分たちから少し距離を置いて，新たな考えを導き出せるきっかけをつくる。当事者である田中さんだったらどうするかと，問題の本質を妻と長女が相互に確認する機会となる。

ⓓ一番困ることは何でしょうか。

「6つのきっかけとなる質問」①にあたる。何がこの家族に生じているのか共通理解を促す質問である。問題解決の出発点となり，本題に切り込んでいくきっかけになる。

ⓔ弟（長男）さんと今日のような話をしたことは。

「6つのきっかけとなる質問」⑥'にあたる。「弟さんは，このことについてどのように話していますか？」という内容を尋ねている。単純に会話の有無を質問しているように見えるが，妻と長女それぞれが長男をどのようにとらえているのかを表出するきっかけとなる。

＊　＊　＊

徐々に，看護師との一問一答ではなく，妻と長女の本音の対話が促進されていった。この1回のインタビューだけで問題を解決しようとするものではない。このインタビューは，田中さん家族の本来の力が発揮できるきっかけを生む。妻と長女は，このインタビューによって，考え方や受け取り方に違いがあることに気づいた。また，家族に対する思いも表出できた。帰宅後に生じるこの家族の新たな展開を信じて，その後の報告を待つことも家族看護の醍醐味であると考えている。

引用・参考文献

1）内閣府：平成24年度高齢者の健康に関する意識調査結果（概要版），2012. http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h24/sougou/gaiyo/（2015年8月閲覧）

2）内閣府：平成19年度高齢者の健康に関する意識調査結果（概要版），2007. http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h19/kenko/gaiyo/（2015年8月閲覧）

3）厚生労働省：中央社会保険医療協議会総会（第291回）議事次第，在宅医療について，2015. http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000074277.html

4）日本看護協会：日本看護協会が提案する介護施設等における看取り研修プログラム，2014.

5）日本看護協会編：介護施設の看護実践ガイド，医学書院，2013.

6）牛田貴子他：指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとって「お迎えを待つ」ということ―高齢者が語るend-of-lifeから，山梨県立大学看護学部紀要，Vol.9，P.1～11，2007.

7）児玉久仁子：エンド・オブ・ライフケアの家族の「和解」を支えるアプローチ，家族看護，Vol.12，No.1，P.50～56，2014.

8）牛田貴子他：Y県下の介護保険施設に勤務する看護職が捉えた終末期（end-of-life）における意思決定の現状，山梨県立大学看護学部紀要，Vol.8，P.9～15，2006.

9）牛田貴子：ケア場面で考える家族看護の展開，P.153～159，エス・エム・エス，2009.

10）前掲9），P.165.